「パブリック」が意識できる大人に

今から十年前、カナダのバンクーバーで冬季オリンピックが開催されました。その時の男子ハーフパイプ８位に入賞した日本のＫ選手。実は、彼には入賞以上に世間を騒がせたできごとがありました。

腰パン、緩めたネクタイ、前を開け放したブレザー、シャツの裾（すそ）出し……日本選手団の制服をこういう着こなしで記者会見場に臨んだ彼の姿がテレビ放映されると、日本中から抗議が殺到しました。

それでも反省せず、次の記者会見では「反省してまーす」「ちっ、うっせーよ」という言葉を発し、オリンピック参加も危ぶまれる事態となりました。当時所属していた大学の監督は現地に出向いて謝罪。大学の応援会も彼の応援を中止しました。ＪＯＣ（日本オリンピック協会）の団長の判断で、競技には参加できたものの、競技に参加する以前の話題が、日本中を騒がせた有名（？）な人物です。

恐らく、オリンピックの日本選手団のユニフォームだったから、世間は騒いだのでしょう。大会に一個人として参加するときに同様の出（い）で立ちだったら、世間は騒がなかったと思います。

これは、Ｋ選手が「プライベート（私的）」と「パブリック（公的）」を混同していたから生まれた事態です。オリンピック出場を勝ち得たのは、自分の努力かもしれませんが、日本の代表として出場するオリンピックでは、容姿や態度、話す内容、競技成績全てが「パブリック」と言えます。その象徴がユニフォーム（制服）なのです。

最近、生徒の中に、ハーフパンツからシャツを出している生徒をよく見かけます。真夏であれば、暑さ解消のために一時的に出しているのだなあと同情できますが、朝晩ずいぶん涼しくなったこの頃目立ってきたことを考えると、判断力の未熟さが原因であると私は思います。

私服であれば周りがとやかく言うことはできませんが、ジャージやシャツも立派な制服の一つです。自分の自己満足による着こなしは通用しません。三年生になると、高校見学や受験等で制服を着て高校を訪問します。そういう時に身なりや服装で注意を受ける生徒はまずいません。状況が「パブリック」だとわかっているからです。

「パブリック」とは、自分にとって都合がよいか否かで判断するものではありません。自分に影響があるときにだけ身なりを整えるのは、あまりにも幼すぎます。中学時代に制服というものについて深く考え、大人に近づいてもらいたいものです。

（九月三十日　記）